修 士 学 位 請 求 論 文

要 旨

「金剛石」が「ダイヤモンド」に変わるとき
—ダイヤモンド関連語彙の歴史—

国際日本学研究科　国際日本学専攻

日本語学・日本語教育学研究領域

4910126004

篠原　あおい

明治時代の日本において最も大衆に愛読された小説のひとつが、尾崎紅葉の『金色夜叉』である。この作品における「金剛石」と「ダイアモンド」の表記に対する疑問をきっかけとして、「金剛石」と「ダイヤモンド」の来歴と関係を明らかにしたいと考えた。

本稿の目的は、＜「金剛石」と「ダイヤモンド」の来歴と関係＞とダイヤモンド鉱物を指し示す5つ（「金剛」「金剛石」「ばさら」「ギヤマン」「ダイヤモンド」）の＜ダイヤモンド関連語彙の歴史＞について明らかにすることである。

これまで「ダイヤモンド」をはじめとするダイヤモンド関連語彙の語誌研究はなされていない。また、ダイヤモンド鉱物は日本では産出されない上、海外から日本への正確な流入時期も定かではない。よって、ダイヤモンドは日本人にとって身近な鉱物でありながらも、日本語学の観点からは謎に包まれた存在である。ダイヤモンド鉱物に関連する語彙の広まりと定着について明らかにすることは、語誌を解き明かすだけでなく、未だわかっていないことの多いダイヤモンド鉱物の日本への流入時期や歴史についての手がかり、外来語の広まりについての考察を得ることができる点でも意義があると考えた。

研究資料としては、主にコーパス・新聞記事・辞書を用いた。研究方法は以下の通りである。目的の一つ目である＜「金剛石」と「ダイヤモンド」の来歴と関係＞を明らかにするために、3つの観点から調査を行った。それは、①『金色夜叉』、②コーパス、③新聞記事における「金剛石」と「ダイヤモンド」の用いられ方に関する調査である。

①の『金色夜叉』は本研究の動機でもあり、明治期に大流行した新聞小説である。作中に「金剛石」と「ダイヤモンド」がどのように登場し、何を象徴しているかについて、用例を抜き出して考察した。

次に②のコーパスは、現代での「金剛石」と「ダイヤモンド」の使用頻度について明らかにするために用いた。検索結果からダイヤモンド鉱物を示していると考えられる用例を抽出し、その結果をもとに現代語における2語の使用頻度を判断した。

③の新聞記事では、明治・大正・昭和期の読売新聞の記事を対象とし、「金剛石」を含む記事において「金剛石」の読み仮名がどのように付されているかを調査した。

目的の二つ目である＜ダイヤモンド関連語彙の歴史＞については、現在日本でもっとも信用度の高い辞書である『日本国語大辞典』をもとに、5つのダイヤモンド関連語彙の初出年を確認した上で、江戸から平成までの辞書を用いて見出し語と語釈の有無を調査した。加えて、辞書の調査結果からダイヤモンド関連語彙の勢力関係を考察した。

以上の調査から得られた結果は次の通りである。

はじめに、＜「金剛石」と「ダイヤモンドの来歴と関係＞についての3つの観点からの調査結果である。まず、『金色夜叉』では「金剛石」「ダイヤモンド」は登場人物や作品のテーマを示す重要なキーワードとしてくりかえし登場した。この作品によって、明治期の人々に光り輝く高価なダイヤモンドの印象が強く印象付けられることとなった。次に、コーパスの結果からは、現代においては圧倒的に「金剛石」よりも「ダイヤモンド」の用例

数が多く、市民権を得ていることが明らかになった。最後に、新聞記事の用例からは、「金剛石」が中心に用いられていた時期から、明治時代には「金剛石」「ダイヤモンド」が併用されるようになり、とりわけ明治時代後期である1896年（明治29年）から1901年（明治34年）にかけてが「金剛石」から「ダイヤモンド」への過渡期であると明らかになった。それは先にも登場した『金色夜叉』の連載期間の1897年（明治30年）から1903年（明治36年）と大部分重なるものである。新聞が購読者数を伸ばしていたことや社会現象にまでなった新聞小説である『金色夜叉』の爆発的流行という時代背景を鑑みるに、この作品の存在が、当時徐々に広まりつつあった「ダイヤモンド」という語の広まりを加速度的に早めたことは間違いない。そして、それは新聞というメディアが言葉の歴史に大きな力をもたらした顕著な例だと言える。

続いて、＜ダイヤモンド関連語彙の歴史＞については、諸資料から「金剛石」と「ギヤマン」が1708年、「ダイヤモンド」が読み仮名としては1877年、単体としては1885年の文献が初出であることが確認できた。仏教語である「金剛」「ばさら」については正確な初出文献を突き止めるに至らなかったため、今後の課題としたい。辞書の調査結果からは、5つのダイヤモンド関連語彙の中でも、明治・大正・昭和前期までは「金剛石」が、昭和中期からは「ダイヤモンド」が主力として用いられていることがわかった。特に、1960年代前半（昭和30年代後半）が、「金剛石」が「ダイヤモンド」に主力の座を譲り渡していった時期であった。

本稿で言葉の過渡期を明らかにするために用いた研究資料は新聞記事と辞書であり、性質が異なるものである。新聞記事で用いられている言葉は、その時代に社会で用いられている言葉であるのに対し、辞書で用いられる言葉はその編纂作業にかかる時間の長さと言葉への保守的な姿勢から、発行年に社会で使われている言葉とはずれが生じている。しかし、辞書に登場し、さらに主力語として見出し語と語釈が記載されるということは、その言葉が社会に普及し、世間に認知され、定着した証拠であると言えよう。「ダイヤモンド」の初出は、明治時代である1877年（明治10年）である。そのたった11年後の1888年（明治21年）にははじめて辞書の見出し語と語釈に登場し、初出から約20年で新聞記事での過渡期を迎えるのである。いかに「ダイヤモンド」という語が急速に広まり、社会に受け入れられて定着していったかがわかる。

そして、「ダイヤモンド」の登場と普及により、江戸時代から明治時代までダイヤモンド鉱物を指し示す語として活躍していた「金剛石」と「ギヤマン」は徐々に衰退し、主役の座を「ダイヤモンド」に明け渡したのである。

また、新聞記事での「金剛石」から「ダイヤモンド」への過渡期から、辞書での過渡期まで、ここには、60年強の時の隔たりがある。先にも述べたように辞書は言葉の現実をうつしているわけではない。「金剛石」と「ダイヤモンド」に関して言えば、実際の社会から60年以上の遅れをとって辞書は言葉の過渡期を迎えているのだ。

現代の若者においてはほとんどが「金剛石」＝「ダイヤモンド」と考えることはないだろう。しかし、実際の社会では明治時代後半、辞書の世界では昭和 30 年代後半の過渡期を迎えるまでは確かに「金剛石」の方が「ダイヤモンド」よりも一般的であり、主流だったのである。「金剛石」から「ダイヤモンド」へと表記する言葉が変わっても、その言葉の意味するものはなんら変化しているわけではない。しかし、仏教的意味合いや尊い学びの教訓のイメージが付随していた「金剛石」に対して、「ダイヤモンド」はきらきら輝く美しさと外来語のおしゃれで洗練されたイメージを持っていたと言える。「ダイヤモンド」が日本語の歴史に登場してから四半世紀もたたないうちに急速に広まり、市民権を得ていったのは、このような「ダイヤモンド」という言葉に付随する美しさや豊かさのイメージの力もあったのではないかと考えられる。言葉は生きているものであり、人々や時代と共に変化し続ける。だからこそ、言葉は人の心や感性を表現するものであり、文化や社会を形成するものである。ダイヤモンド鉱物はどのような呼び名で呼ばれていたとしても、ダイヤモンドのその輝きは今も昔も人の心をとらえて離さないものなのである。